



小学6年のときに男子生徒が記した手記。「いままでなんかいも死のうとおもった。でも、しんさいでいっぱい死んだからつらいけど、ぼくはもう死ななかつた」と書かれている。

原発いじめ 勇気の告白

「ばいきんあつかい」「福島の人はいじめられると」

福島第一原発事故で福島県から横浜市に自主避難した中学1年の男子生徒(13)が、いじめを受けて不登校になった問題で、男子生徒の代理人弁護士が15日、生徒の手記を公表した。「賠償金あるだろうと言われ、抵抗できなかった」などと心情をつづっている。市教委は学校の対応の遅れを陳謝した。

避難先の横浜で被害 中1手記公表

記者会見した黒沢知弘弁護士によると、手記は小学6年生だった昨年7月に書かれたもの。いじめで子どもが亡くなるという報道があることから、「いじめがなくなつてほしい」「多くの子どもたちに少しでも励みになれば」と男子生徒自身が公開を決心したという。

められるとおもった。なにもできないなかった。手記は当時をそう振り返った。市教委の第三者委員会の調査によれば、小学5年の5月、加害児童ら10人ほどと遊園地やゲームセンターなどに行くようになり、遊園費のほか、食事代や交通費も含め1回5万〜10万円の費用を10回近く負担した。児童2人に、一緒に遊ぶためのエアガンも買ったこともあった。男子生徒は親の現金を持ち出し、総額150万円に上るといふ。

「お金もつていこうと言われたときすこいらいらとくやしさがあつたけど、いこうするとまたいじめがはじまるとおもつてなにもできずただくわてしようがなかった」「ばいしょ金あるだろと言われむかつくし、いこうできなかったのもくやし」

教育長、遅い学校対応認める

横浜市の岡田優子教育長も会見を開いた。「1カ月以上不登校が続く、金品の問題が出た。小5の6月時点で重大事態とすべきだった」と話し、学校の対応の遅れを認めた。男子生徒に対しては「申し訳ない」とを話した。子どもの成長のサポートを全力でやっていきたい」と話した。

黒沢弁護士によると、生徒は小学校を卒業し、今はフリースクールに通う。「いままでなんかいも死のうとおもった。でも、しんさいでいっぱい死んだからつらいけどぼくはいきるときめた」。心境をそう書いていく。(永田大)

デジタル版に手記抜粋

(大森浩司、木村司)